



選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

イボとパイナップル

梅田 明日佳

どうにかこうにか、ぼくの小学校生活も、あと少しとなりました。何かを書き残そうと思った時、いちばんに思い出したのは、イボのことです。五年生の夏から半年、ぼくはイボのせいでたいへん痛い思いをしました。ぼくは今、その記憶を忘れないように筆をとります。

四年生の夏のことでした。ぼくは、
「あゝさっぱりした。」

と言いながら、風呂からあがりました。ドアのへりをふんだ時、足裏に何かあるのに気付きました。見ると変な

物ができています。

「母さん、足に何かできてる。」

と言ってみせたら、

「ああ、こりゃ魚の目やね。イボコロリでもつけときゃ治るけえ。」

と言いました。そんな事なら大丈夫やと思って、ぼくは当時、学校に行くのが面倒になる位やりたいことがいっぱいあって忙しかったので、ケロッと忘れてしまいました。その時ぼくは、これで後でさんざんな思いをするなんて思っていませんでした。

一年が経ち、五年生になってしばらくして、やっとぼくは足の裏についている魚の目のことを思い出しました。

「そーいや母さん。魚の目どうしようか。」
と言いました。お母さんは、

「そーいや、そーやったねえ。」

と言って、イボコロリを買って来ました。

ぼくは、魚の目退治を始めました。

「早う取れないかなあ。」

と言いながら、イボコロリをぬりました。皮ふが盛り上がったたら、つめ切りで切ったり、つめでいじったりしていました。

しかし魚の目はなかなか取れません。説明書には、二〜三週間で取れると書いてあるのに、もうずいぶん経っています。

「一年もほおっておいたから、なかなか取れんのかな。」

と違って、しんぼう強くぬり続けました。

ある日ぼくは、左手の人差し指に、イボのようなものを見つけました。お母さんに見せると、

「水イボやろう。」

と言って針を持って来ました。それに針を刺したら、汁が出てくるはずなのに、血が出てきました。

「こりゃ、水イボやないわ。」

とお母さんは言いました。そこでぼくは、手のイボにも

イボコロリをぬることにしました。

しかし、足の魚の目も手のイボも治りません。それどころか、手のイボが、親指、中指、薬指にもできてきました。

「もうこれは、お医者さんに診てもらった方がええかもしれん。」

ついにお母さんが白旗をあげました。

夏休み、ついにぼくは皮フ科に行きました。

やなぎさわ先生は、手のイボと足の魚の目を見て、

「これは魚の目じゃありませんよ。イボですね。足のが全部うつったんですよ。」

と言いました。ぼくは、今までやってきたことが良くなかったと知ってガツカリしました。

それから先生は看護師さんに、

「液体ちっ素を持ってきて。」

と言いました。エキタイチツソって何だ?と思っっていると、ポコポコポコという音が聞こえてきました。その音は、紙コップくらいの大きさの入れものから聞こえてき

ました。

そして先生は、そのコップに入っていた二本の木の持ち手をつけた綿棒をかわりばんこにとり出して、手のイボに当て始めました。

最初は何ともなかったのに、五回目から、刺さるような焼けるような痛みが走りました。

思わず、

「ギャーツ!!」

と叫んでいました。

足の時は、足をバタバタさせてしまいました。江戸小ばなして、罪人が首を斬られる時に、「首のおできをよけて斬ってくれ。」というのがあったけど、その気持ちがよく分かりました。先生はすました顔で、「一週間に一度来てください。だいたい十回くらいで治ることが多いです。」

と言いました。一日だってムダにできない夏休みが、イボのために台無しです。

「イタタタタタ。」

と言いながら、サンダルから足をうかすようにして歩いて帰りました。

液体ちっ素の正体はその後、近所の小倉高校の文化祭で知りました。化学部で、果物や花を液体ちっ素で凍らせる実験をしていました。沸点がマイナス百九十六度という説明をしながら、白いけむりがもうもうとしている中にミカンやパインを入れたら、シャーベットになって出てきました。ぼくは、おーこわと思いましたが、ミカンとパインはおいしかったです。

やなぎさわ先生の予言どおり、手のイボは治ったけど、足のイボだけは一年間ほおっておいたのがいけなかったのか、秋がすぎ冬が来てもなかなか治りませんでした。土曜日の午前中は、新聞記事を切りぬいて感想を書く自学するのが楽しみだったのに、イボのおかげで全滅です。皮ふ科の「名探偵コナン」をたくさん読めたのはうれしかったけど、ぼくはだんだんアホになっていく気がして心配でした。

そうして毎週イボのシャーベットを作りに行っているうちに、一年で最後に行く日になりました。

「チクシヨ。このイボ、年越ししてしもうた。」

と言うと、やなぎさわ先生と近くにいた看護師さんが、

「そりゃ、災難やねえ。」

と言って笑っていました。

ぼくと足のイボは、仲良く新年を迎えましたが、節分にはなくなっていました。今は、わずかなあとが残っているだけです。どうやらイボをかばって歩いてきたみたいで、歩き方に変なくせがついてしまいました。おイボさまの、とんでもない置きみやげです。

ぼくのイボが足裏ですくすくと育っていた四年生のころ、ぼくの家ではもうひとつ、すくすくと育っていたものがあります。

それはパイナップルです。

三年生の時、「パイナップル」という本に載っていた「ミニパイナップルの作り方」に挑戦しました。葉

のついたパイナップルを買ってきて、葉の部分を切り取ったあと、下の葉をむしり取り茎を出して植えたら、二年くらいでチューリップの花みたいになる。パイナップルができるように書いていたので、ぼくにもできそうだなと思ったからです。ところが、冬にベランダに置いていたのが原因で枯らしてしまいました。「もう一度！」と決意して、四年生でリトライしたら、今度は夏になって葉がどんどん伸びはじめました。去年のより今年のほうが丈夫なパイナップルだったみたいでした。いろんな人にパイナップルの話をしていたら、友達のお母さんに

「パイナップルも、おしべとめしべがないと実ができませんじゃないん？」

と言われました。そう言われてみると、そうかもしれんと思いましたがナゾのまま、その間もパイナップルは元気いっぱい育っていききました。

夏が過ぎると大変になってきました。パイナップルを家の中に入れてくれないけなくなったのです。お母さんは、家の中の陽の当たっている所に一日何度も動か

して、面倒だとブーブー言いました。冬は台所に置いたり、熱いやかんを横に置いたり、こんろの横に置いたりしました。そのかいあって、パイナップルは元気に冬を越しました。

五年生の夏、古い葉が枯れて、新しい葉が天をつくかのように伸びていきました。「パイナップリー」と言ってもいいくらい、縦横一メートルを越えてきました。そこで、鉢をとびきり大きなものにかえることにしました。すると、土が新しくなったため、ますますパイナップルはたくましくなって、置き場所に困るようになりました。秋が来て、パイナップルはテーブルをひとつ占領するくらい大きくなりました。台所にはもう置けません。しかも葉っぱは刀のようにとがっていて、とても危ないのです。

六年生になって、ずっと気になっていたパイナップルのなぞがとけました。ぼくは毎年夏休みに、下関のじいちゃんばあちゃんに、「なぜ？どうして？科学のお話」

という本を電話で読んでいますが、その六年生の本に、「どうしてパイナップルには種がないの？」という話が載っていたのです。

パイナップルは品種改良をした結果、だんだん種がなくなったので、「株分け」という方法で増やすと書いてありました。ぼくの家でしていることが、「株分け」ということです。

ということは、「ミニパイナップル」どころか、大きくて、しかも食べられるパイナップルができそうです。これでぼくは、ものすごく安心しました。もう二年経ったので、「何としても今年パイナップルが見たい！」という気持ちになりました。が、パイナップルは下の葉を枯らしながら、ますます大きくなっていくばかりでした。

もう一度、三年生の時に借りた「パイナップル」を読み直してみると、いろいろなことが分かりました。書きだしてみます。

パイナップルは、みのてっぺんや、くきのわきか

らでる めを なえにして ふやします。この めは
 だた ばしよによつて みが できるまでの ひにちが
 ちがいます。

かんががうえてからみができるまで3ねん。

えいがうえてからみができるまで2ねん。

きゆうがうえてからみができるまで1ねん。

かんけいがうえてからみができるまで1ねん。

パイナップルの葉の部分は冠芽なので、植えてから実
 ができるまで、うちのパイナップルは三年かかるという
 ことです。

また今年も、パイナップルは家の中で冬越しです。今
 年はうちでいちばん大きいテーブルがパイナップル専用
 置き場で、去年のパイナップル用のこたつが家族用で
 す。ぼくは、来年こそは実ができるだろうこのパイナッ
 プルを、育て続けようと思います。

今となれば、どうしてあのころは大変と思っていたの
 か不思議に思う幼稚園生活、がんばっても報われない小

学校生活、趣味のガンプラ作りのこと、くずし字や江戸
 からくりのこと、まだまだ書きたいことはたくさんある
 ので、これからも書くつもりですが、ひとまずここで筆
 を置くことにします。(十返舎一九の真似)

参考文献

学研「なぜ?どうして?科学のお話6年生」
 フレーベル館「しぜん キンダーブック③ パイナッ
 プル」